タマネギ白色疫病（病原菌：*Phytophthora porri* Foister）

○ 被害と発生生態

本病は糸状菌による病害であり、主に葉に発生する。はじめ葉身の一部に不整形、周辺の不鮮明な１～３cm の大型の病斑を生ずる。病斑は、最初は暗緑色、水浸状だが、まもなく色が抜けて青白色の病斑となり、病斑部で折れ曲がって葉は下垂し、こより状に先枯れとなる。病斑が古くなると白色～灰白色になり、健全部との境は明瞭となる。病斑部の葉の内側に菌そうは認めない。末期になると枯葉色に変わり、株が萎縮する。

菌糸、卵胞子および厚壁胞子が土中や被害植物上に越夏、越冬し、好適環境下で発芽してネギの葉身に侵入する。

菌糸の生育適温は 15～20℃で比較的低温が好適であるため、山口県では主に２月～４月頃に発生が認められる。また、菌のまん延期には雨滴や水が媒介に大きな役割をもち、降雨は発病を助長する。低温多雨の条件が続く年に発生しやすい。

特に、大雨による浸冠水後には被害が急激に拡大する。

○ 防除方法

（ア）耕種・物理的防除

・過去に発病したほ場では育苗しない。
・定植（移植）の際は、苗を厳選し、保菌苗を持ち込まない。
・苗床、本ぽの排水を良くする。
・枯死した葉は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。

（イ）薬剤防除

・薬液の付着性を高めるために展着剤は必ず加用し、薬液が十分に付着するように丁寧に散布する。
・水媒伝染するため、降雨前後の防除を徹底する。
・薬剤の感受性低下を防ぐため、同一成分及び同一系統薬剤の連続使用を避け、ローテーション散布を行う。

タマネギ白色疫病の病徴

白色病斑部の葉が折れて垂れ下がった状態